

15 読者のひろば

漢詩紀行：「伊豆・函南」

藤野仁三*

筆者の恩師が伊豆・函南に居を構えている。場所は雑木林がうねる山間の地。別荘地として開発されたところで、富士山が眼前に広がり余生を送るには格好の地である。場所柄、温泉はいつでも出る。浴室は西方を総ガラス張りにし、風呂に入りながら富士山の大パノラマを楽しむことができる。「仰角も伏角もなしに富士の山」－これは恩師の詠んだ俳句である。

富士山の天気は気まぐれで、何度か訪問しているにもかかわらず、筆者は未だに浴室からの絶景を楽しんだことがない。不運をかこつと「君は普段の心がけが悪いのではないのかい」などとからかわれる始末である。

恩師は、この山荘で単身、「晴吟雨読」の生活をしている。吟は謡曲であり、読は英文学と歴史小説である。このところ戦国時代の天才武将を描いた歴史小説「天を衝く」（高橋克彦）の英訳に余念がないという。米国人翻訳家と共著でいずれ訳書が海外の店頭に並ぶであろう。

恩師は喜寿を過ぎてなお家事五業はお手の物。老若男女を問わず教え子の訪問があればいつも手際よく酒の肴を用意してくれる。酒は日本酒、ぬるめの燗。昔話も酒の友、つつい深酒となってしまう。

今回の漢詩は、今春、この恩師を訪ねたときの感慨を詠ったものである。

本誌にはいつも七言絶句（7字4句）を寄稿しているが、今回は気分を換えて五言律詩（5字8句）にした。この詩のルールは、平仄（声調）の決まりを除けば、偶数句の最後の字が韻を踏むこと（脚韻）、3-4句と5-6句が対になること

（対句）である。また、通常、前半の4句と後半の4句では詩の対象が変わる。今回の詩では、前半で山荘の風景を、後半で恩師の生活ぶりを対象としている。言い換えると、最初は屋外を見て、次に室内へ、そして浴室とレンズが移動する感じである。

春日訪函富亭

春日	函富亭を訪ねる
老師棲穩処	老師 棲穩する処
山家白雲生	山家 白雲生じる
孤径重階陰	孤径 階を重ねて険しく
叢林落葉明	叢林 葉を落して明るし
長吟時独酌	長吟し 時に独り酌み
静読後徐烹	静読し 後に徐に烹る
勸客温泉浴	客に温泉浴を勧め
垢塵沐自晴	塵垢沐せば自から晴れる

（五律脚韻、生・明・烹・晴）

この詩はかなり唐風を意識している。というよりも、杜牧や白居易などの名人からアイデアを借用している。例を上げれば、1句と2句は、杜牧の有名な「山行」詩の「遠く寒山に上れば石径斜めなり、白雲生じる処人家あり」をヒントにしている。また、第5句と6句の対句も、白居易の「閑吟其の二」詩の「長歌し時に独り酌み、食に飽きれば後に安眠す」を踏まえている。この詩を歌った当時の白居易は穩退生活。恩師の生活と重なる部分がある。

この律詩から悠々閑々とした雰囲気や少しでも感じていただければ満足なのだが読者の感想はいかがだろうか。

*東京理科大学専門職大学院 教授